

サランの戦士~Little Hero Paradise~

Division E1:第 1回ジャーナル

“暗黒のクリスマス”

Written by 角南一辺



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

サランの戦士~Little Hero Paradise~

●天文台に行きましょう

天文台に続く、ゆるやかな坂道。普段は人通りもまばらなこの場所に、今は賑やかな子供達の一団が闊歩していた。冬の夕暮れは足が速い。辺りはもうすっかり真暗だ。

うひょ〜、さつみ〜っ！　なんとかしろ達彦お〜」

「なんとかなる訳ないでしょバカ男子！」

わいわい大騒ぎのクラスメイト達に、苦笑するしかない鋼達彦。彼が天文台に誘ったのは久保田香織ひとりだった筈なのだが、何故かこんな大所帯になってしまった。子供には、楽しいことを嗅ぎつける天性の嗅覚が備わっているのだ。ついでに、それを一瞬で広める情報網も。

「じうう日は観測に向いているんです。今日は天文台、私達の貸し切りですしね。じっくり星の世界が楽しめますよ」

達彦の説明に、おー、と感嘆の声。

達彦君、詳しいね」

先日、予約を入れるついでに、色々聞いておきましたから」

鋼達彦、実に気の利く子供である。

「で、少し急ぎましょう。子供だから時間にルーズだって、思われたくないですからね」

ういーっす、はーい、と皆の返事。香織は集団の一番後ろで、そんなクラスメイト達を見つめていた。

見るからに古い山の上の天文台は、達彦が生まれるずっと前……彼の両親が生まれるよりも前に出来たものだ。この手の施設の例にもれず、時折、大学の先生や、近くの学校の天文部が使っくらいで、あまり利用はされていない。ただ、管理をしているお爺さんは研究者として有名で、昔、新しい彗星を発見して名前を付けたこともあるという。このご老人、近所の子供達にはむしろ、天文台のへんくつ爺さんとして名が通っていたりする。

「あらあら、いうっしやい」

達彦達が建物の中に入ると、事務所にいた世話好きそうなお婆さんが顔を出した。

小学生は無料だからね、興味があるならいつでも来てちょうだいね。観測室のお爺さんちょっと無愛想だけど、悪い人じゃないのよほんと。でももうちょっと人当たりが良ければねえ」

……実に良〜喋る。

おシャベリ魔人だ」

わ、わるいよそんなあ」

クスクス笑いの子供達に、お婆さん職員は喋るのに夢中で気付いてない。と、観測室の扉が開いて、気難しそうな老人が現れた。

田中さん、あんたが一番騒がしいというのはどういう事だ」

怒られて、首をすくめる田中のオバサン。

「すいません佐々木さん、つい……。それじゃあね、楽しんで行ってね」

お婆さん、そそくさと退場。

「こっちだ」

促された子供達も、皆、緊張の面持ちが、そんなものは観測室の中央に鎮座した巨大な望遠鏡を見た瞬間に吹き飛んだ。

「でかい！」

「すごい！」

「みたい！」

大はしゃぎの子供達を、老人が咎めることは無かった。

なるほど、型是相当に古そうですが、光学式の望遠鏡としては良いもののようですね。何より、手入れが行き届いている」

感心する達彦を余所目に、我先にと望遠鏡に駆け寄る子供達。

「そら、順番を守れん奴には覗かせんぞ。ここに早見表があるから、見たいものがあれば言いなさい」

「うわ、何これ！？　おどろどろ〜！」

「今見えてるのは蟹座の暗黒星雲だ」

「うう、はやくかわってくれよう」

「灰、土星見よう土星！」

「えー？　アンドロメダ星雲だよっ！」

「うお、M78星雲って本当にあるのか」

皆が盛り上がる中、賑やかな輪の中に入り込めず、寂しげに立ち尽くす香織に、誰も気付かない。ただひとり、達彦以外は。

「せつかく来たんですから、見て行きましょう。」

星、嫌いですか？」

達彦に問いかけられて、香織は大きく首を振った。肩を押され、おずおずと進み出た彼女に、お、久保田わりーわりー、忘れてたよ」

と男の子が席を譲る。達彦、溜息とともに天を仰ぐ。悪気はないのだ、悪気は……。

どうです？」

「……うん。とっても綺麗」

香織の控えめな笑顔に、ほっと胸を撫で下ろす達彦だった。

サランの戦士~Little Hero Paradise~

●聖者が無理矢理やってくる

観測会が、1時間を越えた頃。

「佐々木さん、大学からお電話です～」

おばさん職員に呼ばれ、佐々木老人が席を外した。子供達は望遠鏡を覗いたり、貸してもらった子供向けの図鑑をネタにわいわい楽しんでいたのだが、

「あ、ソリが飛んでる」

香織が突然、妙な事を口走った。

「兄、あ、ほんとだ!」

「何々!？」

「うげ、すげ～!」

皆、望遠鏡を覗いて口々に言い立てる。

「ソリって、そんなものが見える筈は」

半信半疑で望遠鏡を覗き込んだ達彦は、見紛うことなきソリのシルエットに言葉を失った。ソリは、まるで彼の視線に気付いたかのように方向を変え、こちらに向かって来る。次第に影は大きくなり、ソリを引く不気味な獣の姿が露に……

「あ、ありません理屈に合って無い……」

達彦が混乱する頭を整理する間もなく、天井でガリガリゴリ!! ととんでもない音。

「ほ～ほ～ほ～! 見ましたね、見てしましましたね良い子の皆さん～」

天井の開口部から、イタチに似た巨大な獣が顔を覗かせ、牙を剥き出しにして唸っている。そして、ずるりと這い降りて来た黒い塊。

「サンタだ…… 黒いけど……」

誰かの呟きを聞くまで達彦は、それが白い髭をたくわえた老人であり、お馴染みの装束の色違いである事に気付かなかった。あまりにも、印象が違い過ぎたのだ。

「そう、我こそが真のサンタクロ～ス!」

「うそだ!」

「黒いし!」

「不気味だし!」

「トナカイじゃないし!」

「クリスマス過ぎてるし!」

子供達、大ブーイング。しかし、ブラックサンタは非難の声など何処吹く風と、髭を扱きながら満面の笑み。

「ほ～ほ～ほ～。これからは毎日がブラック・クリスマス～!! 世界中の良い子供達をもれなく救済するのが我輩の崇高な役目。さあ、皆にプレゼントをあげよう～」

黒い袋からサンタが取り出したのは、縁起で

もない黒いリボンで飾られた、大小様々な箱だった。勢い良くば撒かれた箱は、まるで吸い寄せられるかのように子供達の手に落ちて行く。

「おお! ゲーム○ーイの新しいやつ! ……」
と思ったら、折りたたみのゲームウォッチじゃん!」

「い、いまさらたまごっちって……」

「キャベツ畑人形? しらな～い、変～、顔こわい～。あ、お腹の中に何か入ってる! いや～! きもちわるい～!!」

「偉人伝シリーズ6、ワシントン」

「ねえねえ、PC- FXって何?」

怪しいと思いつつも、ちょびっと期待に膨らんでいた子供達の心は、一瞬にしてがっかり色に染め上げられた。それに呼応するように、プレゼントから湧き出した禍々しい気配。黒い霧と化した邪気は、瞬く間に辺りを覆い尽くしてしまった。暗闇の中で、自分の声だけが響く。

期待などずるから、裏切られるのです。希望など持つから、苦しいのです。初めから望まなければ、常に平穏でいられる。やめましょう、望むことなど。やめてしましましょう……

そっとした。無機質な自分の声に。そして、少なからず同意しかけている自分の心に。同時に、それが幻術の類であることも達彦は理解した。

「見えるぞ…… させるか!」

解き放ったカードの力が、忌々しい暗闇を打ち破り、邪悪な効力を一掃する。目の前には、苦々しい表情のブラックサンタ。皆は氣を失って倒れていたが、幸い、彼らへの術も一緒に解けてくれたようだ。

「……どうやら、噂の悪い子が混じっていたようですな～。よろしい! 徹底的に救済、救済～っ!」

生憎ですが、宗教関係は玄関にも入れずお祈り願うことになってるんですよ!」

体型からは想像できない程に、ブラックサンタの動きは素早かった。だが、荒事なら達彦とて望むところだ。

「当たるか! ……痺れろっ!!」

ぐお、と叫び声を上げ、もんどりうって転がるサンタ。案外弱い。

「さあ、洗い浚い喋ってもらいますよ。あなたの正体、目的をね」

サランの戦士~Little Hero Paradise~

ら、ううひゃいバキ、ほれはホホナひはいふ
ふフビほひひははへふはっ！」

あー、痺れちゃえ』を使ったのは失敗だったかも)

ぼりぼりと顔を掻く達彦。その時だ、破砕音と共に、巨大な影が彼の頭上を覆ったのは。咄嗟に『当たるか！』を使えたのは、上出来だったと言って良いだろう。辺りに散らばるソリの破片。巨大イタチの一撃は、紙一重で達彦を捕らえ損ね、床に爪痕を残すに留まった。深々と挟られた床…… こんな一撃を食らったら、子供の体などまぶつたつになってしまふ。

「へ！」

来るか、と思ったが、どうやら撤退の指示だったようだ。サンタを口に咥えた巨大イタチは、ひとつ飛びで天井の上まで跳躍し、そのまま、夜の闇に消えていった。達彦は、握り締めていたカードから手を放す。戦える自信はあったが…… 総力戦をせずに済むなら、それに越した事はない。

ほっと、彼が安堵の溜息をついた時、佐々木老人が観測室に戻って来た。これが焦らずにいられようか。この惨状を、一体どう説明すればいい？ 気を失ったクラスメイト達、辺りに散らばったソリの残骸やら天井の破片やら、床の爪痕などなど……。

ところが。

皆、少し疲れたか。可哀想だが、起しなさい。そろそろ帰らなければ、親御さん方が心配するだろう」

「はい」

佐々木老人と香織の会話を、達彦は呆然として聞いていた。見まわしてみれば、あれほどあった破壊の跡が、なにひとつ残っていない。香織以外のクラスメイト達が、図鑑を前にして居眠りをしているのが、唯一、痕跡といえはいえない事もないのだが。

どうしたの達彦くん？」

あー、いや、なんでもありません」

納得できない気分のまま、皆を起して回る竜彦。寝ぼけ眼のクラスメイト達の中にも、誰ひとり異変を訴える者はなかった。

帰り道。空には満天の星と大きな月が輝いていた。

あー、息がしれえ〜」

ひとりが、はーっとやれば、皆も真似るのは

子供の常識。いや、むしろ掟。

白い息に微笑む香織の姿に満足し、この日の事件を忘れかけていた達彦なのだが……。

数日後。町中を歩いていた達彦は、子供達がベイブレードを楽しんでいる光景に出くわした。と、弾き出されたベイが、彼の足下に転がって来た。

あ、これ中〇製のパチモンだ。造詣が甘いから、よくシューターを壊すんですよ)

返そうと拾い上げた時、感じた邪気は紛れも無くあの時の……

たかしちゃん、またこんなところで！ 塾の時間でしょ！？」

駆け寄った母親の、焦燥し切った表情が印象的だった。

「えー、いいよもう。面倒くさいし」

面倒って…… お勉強しないとー」

亡の不況だし、同じだって頑張ったって。結局、パパみたいに子会社に出向させられて、いずれはリストラかな？」

あはは、と笑う我が子に、絶句する母親。

おじいちゃんの年金、けっこうあるんでしょ？」

パパも頑張るのやめて、それで暮らせばいいのに。あ、でも自分の年金は払っというてね。でないと僕が借りる年金がなくなっちゃうもの」

あまりの我が子の駄目人間ぶりに、母親は硬直したまま、身動きも出来ずにいる。そんな母親に見向きもせず、パチブレードに夢中な子供達。

どうやら、暗黒のクリスマスは未だに続いているようだ。

● 次回選択

ア：街で探索

イ：天文台で見張る

ウ：図書館で調べる

その他